

# 「谷行」と「黄鳥」から見る アーサー・ウェイリーの訳文の変容

張 偉雄

(一)

『源氏物語』を、*The Tale of Genji* に英訳し、その流麗な訳文で名を知られるイギリスの東洋学者アーサー・ウェイリーは、その東洋学的な基礎、とりわけ、日本と中国の文化に関する理解を、西洋的な知性と文学的資質に調和させ、数多くの日本や中国の名作を英訳し、且つ学問的な論考をなしてきた<sup>\*1</sup>。

アーサー・ウェイリーは古典作品の翻訳に際して、独自な考え方を持っていた。かれは訳文を「歴史的」(historical) と「経文的」(Scriptural) の二種類に分けている。前者では、原文を歴史的な意義に着目して翻訳をすることで、後者では、古典の原文を、それを利用しようとする人々の持つ現代的な意義を与えて訳すということである。アーサー・ウェイリーは、また訳文の風格や趣を、「文学的」(literary) なもの、つまり構文の美しさ、訳者の創造性を重視するものと、「文献学的」(philological) なもの、つまり原文に対する忠実性を強調するものとにわけているのである<sup>\*2</sup>。本論はアーサー・ウェイリーのこのような翻訳論を念頭に、かれの日本文学や中国文学を翻訳するときの創造的な側面、及びその側面に投影している訳者の文化と、原作に内蔵されている文化の相違による翻訳の変容について、考えてみたいと思う。

一九二一年、アーサー・ウェイリーは、日本の能楽を翻訳し、*The No-Plays of Japan*<sup>\*3</sup> を世の中に出した。一九三七年、かれはまた中国の古典詩集『詩經』を、*The Book of Songs*<sup>\*4</sup> という題で英訳した。本論では、この二冊の翻訳書からそれぞれ、「谷行」と「黄鳥」を取り上げる。

謡曲「谷行」は孝子物語、師弟愛物語、あるいは宗教的美談として描かれたものであるが、「黄鳥」に関しては、主人公が当時の社会的美德とされていた忠、義、信をしっかりと守った話として礼賛されているものだと、残酷な奴隸制度から産み出された悲劇との二通りの理解がある。次にアーサー・ウェイリーが翻訳を通じて、この二作品を如何に理解していたのかを探ってみる。

(二)

昔修験者が峰入りの時、同行の者が病気となったら、谷に落とし捨てて行くという掟があった。謡曲『谷行』はこの掟にもとづく話であるが、京都今熊野の山伏師阿闍梨の峰入りに、幼い弟子の松若は同行を許された。途中で風邪にかかり谷行に処せられるが、阿闍梨の祈願により、伎楽鬼神が現れ松若を生きかえらせた。

この話は、人間の「死」という大きなテーマを扱っている。「死」という人類の自然現象は、時には宗教現象、時には政治現象へと変身して行き、死に赴く人の心情、そして「死」その行為に対する人々の評価は、時代により、論者の文化的な背景によりさまざまである。とくにこの「死」が自然死以外の何かの特別な意味が含まれている場合、それに対する評価はいっそう色濃く評者の色合いが滲んでくるのである。アーサー・ウェイリーも「谷行」を翻訳するとき、かれ自分自身の価値観を投入して、随所に新たなる解釈を加えていたのである。

作品の始まりに、先達が登場し、自己紹介する場面があるのであるが、原文では次のように書いている。

「これは今熊野郴の木の坊に、帥の阿闍梨と申す山伏にて候。さても某弟子を一人持ちて候が、かの者の父空しくなり、母ばかりに添ひて候。又某は近き間に峯入を仕り候程に、暇乞の為に唯今京仕り候。」<sup>\*5</sup>

ここでの帥の「先達」は、特に修験道では、他の修行者を尊くこと、また、その人を意味する。そして、峰入りなどの時に、同行の修験者の

## 「谷行」と「黄鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

先導となる熟達した山伏の意味がある。しかし、アーサー・ウェイリーはこれを単に「Teacher」と訳している。これによって自己紹介のせりふも宗教的な意味合いが消え、単なる「寺子屋」の先生が登場するようなものになってしまったのである。

「I am a teacher. I keep a school at one of the temples in City. I have a pupil whose father is dead; he has only his mother to look after him. Now I will go and say good-bye to them, for I am soon starting on a journey to the mountains.」<sup>\*6</sup>

寺子屋の先生として役を決めた以上、後に出て来る翻訳は、原文にある修行僧や弟子などの言葉が正確に反映されなくなり、この話の中心を貫く「山深く入る修行」が「journey to the mountains」に格下げされてしまうのである。このような格下げによって、作品の次に出る会話も、一種の冒険旅行の話として展開して行くことになる。母と先達は次のような会話があった。

母 「げにげに峯入とやらんは、大事の行とこそ承りて候へ、松若も御供にて候か。」  
先達 「幼き者の供すべき道にてはなく候。」  
母 「さてはめでたうやがて御帰り候へ」<sup>\*7</sup>

これに対して、ウェイリーは次のように英訳している。

MOTHER.

「I have heard that it is a dangerous ritual, Shall you take my child with you?」

TEACHER.

「It is not a journey that a young child could make」

MOTHER.

「Well, — I hope you will come back safely」<sup>\*8</sup>

ウェイリーの訳筆の下で「大事の行」は、「dangerous ritual」に変わり、「めでたう」は、「safely」に変わってしまった。こうすると、宗教的な神聖行事は姿が消えて一つの冒険旅行になってしまった。この会話は、ある程度全劇の基調を決め、物語の最後を暗示しているようである。

話が展開し、山に登ってから間もなく少年が病気にかかってしまって、谷に落とし捨てて行かれる羽目になった。時に師と少年は、次のような会話を交わした。

「いかに松若たしかに聞け、この道に出でてかやうに違例する者をば、谷行とて忽ち命を失ふ事。これ昔よりの大法なり。御身に代るものならば、何か命の惜しからん。進退谷まりて候。」

「仰せ承り候、この道に出でて命を捨てん事こそ、最も望む所なれども…」<sup>\*9</sup>

この会話から、師の弟子愛と弟子の宗教心がしみじみと感じができる。献身することによって、現世に生きる命よりも大事な何かが獲得できる。こういった信念をもっているからこそ、少年が「命を捨てることが最も望む所」と答えた。しかし、このくだりを英訳で見ると、少年の答えがこうなっている。

「I understand. I knew well that if I came on this journey I might lose my life」<sup>\*10</sup>

ここには少年が自ら死を望むというニュアンスは出てこない。もう死ぬという運命から逃れることができなくて、あきらめて自分の命を落とす、という雰囲気が濃厚に出ている。この科白から前に出て来た母と師との会話を合わせて見ると、原文では今度の行事を「大事の行」だと

## 「谷行」と「黄鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

母は認識していた。この母の認識の延長として、少年の死は厳かな宗教儀式のための献身だという帰着は順当である。しかし、これとは反対にアーサー・ウェイリーは最初から「It is a dangerous ritual」と、母の言葉を訳していた。このように変容した母の発想からは、やはり自然へと、後に出で来る少年の「I might lose my life」に帰着してしまうのである。母の心配は当たった。少年が無謀にも幼いわが身を失ってしまった。これによって、古典的宗教美談が現代人の無謀な冒険旅行の悲劇へと変容していったのである。

山伏たちの谷行は神聖なる大法であり、誰でもその実行を妨げることができないものである。先達は「御身に代るものならば、何か命の惜しからん」と表明したが、しかし、そこには、神聖なる大法であるから、この「谷行」はただ無駄に命を落とすだけのものではないことも暗示している。ここには生死を超えた人情を潜めている。しかし、この東洋的な心情はウェイリーの訳筆の下では、すっかり変容した。

アーサー・ウェイリーは「谷行」の解説で、『谷行』とかれが次に訳す『生贊』は、両方とも、「残酷な宗教的な強要」(The ruthless exactations of religion)<sup>\*11</sup>と位置付けている。かれのこの解釈とかれの訳文によって、「谷行」は現代の読者の目にはいかにも、宗教的な仮借なき強要だとしか映ってこないのである。アーサー・ウェイリーはこの解説に表した見解によって、実際にかれは「谷行」を作品の最後まで訳すことをあきらめた。訳文は「仰せ承り候、この道に出でて命を捨てん事こそ、最も望む所なれども」のところまで続き、そして、そのすぐあとに出て来た宗教的な話、とくに「一切有為の世の習ひ、如夢幻泡影如露亦如電」(すべては変わり移るはかない世のならい、幻のごとく泡のごとく 露のごとく 電のごとく……)など、地謡が長く詠ったところを切り捨てて、あっさりと幼い弟子が山谷に突き落とされるところにまで一気に飛ばってきて、地謡の言葉を「コーラス合唱」として、訳文の最後に置き、クライマックスにもっていき、全作品を情緒的に盛り上げたところで訳筆を下ろした。

CHORUS:

Then the pilgrims sighing  
For the sad way of the world  
And the bitter ordinances of it  
Make ready for the hurling  
Foot to foot  
They stood together  
Heaving blindly  
None guiltier than his neighbour  
And clods of earth after  
Flat stones they flung \*<sup>12</sup>

(原文は次のようになる)

皆面々に思ひ切り  
邪見の剣身を碎く  
心をなしてかの人を  
嶮しき谷に陥れ  
上に被ふや石瓦  
雨塊を動かせる  
心を傷め聲をあげ  
皆面々に泣きゐたり  
皆面々に泣きゐたり \*<sup>13</sup>

アーサー・ウェイリーは、執拗に「hurl. Heave. Fling」と言葉を変えて、「強く投げつける」無残な行為を誇張して、逆にかれの認識にある「None guiltier than his neighbour」に、都合の悪い「心を傷め聲をあげ、皆面々に泣きゐたり、皆面々に泣きゐたり」を、きっぱりと姿を萎縮させた。また原作の後半にある画龍点睛的な部分、祈願により、伎楽鬼神が感動して現れて、松若を生きかえらせたという、宗教的美談による結末が完全に切り捨てられたのである。これによって現代西洋人の

## 「谷行」と「黄鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

価値観に理解されやすいような、アーサー・ウェイリー作「TANIKO」が完成されたのである。

### (三)

「死」をテーマとするアーサー・ウェイリーのほかの訳文 Kio sings the oriole (『詩経』「黄鳥」) からも、かれの訳文の変容を窺うことができる。『左傳』文公六年の記載によると、秦の穆公、任好の死にあたり、その国の風俗として、百七十人の家臣に殉死を命じた。その中にはもっとも有為な人材である子車氏の三人が含まれていたという<sup>\*14</sup>。『詩経』の秦風「黄鳥」には、このことを歌っている。次に「黄鳥」三首中の第一首を、原文とウェイリーの英語を交替に並べて比較してみよう。

交交黄鳥

‘Kio’ sings the oriole

止于棘

As it lights on the thorn-bush.

誰從穆公

Who went with Duke Mu to the grave?

子車奄息

Yen-hsi of the clan Tzu-chu

維此奄息

Now this Yen-hsi

百夫之特

Was the pick of all our men;

臨其穴

But as he drew near the tomb-hole

端端其慄

His limbs shook with dread.

彼蒼者天

That blue one, Heaven,  
殲我良人  
Takes all our good men.  
如可贖兮  
Could we but ransom him  
人百其身  
There are a hundred would give their lives. \*<sup>15</sup>

アーサー・ウェイリーは一行一行に合わせて直訳調を取っているが、原文の「誰従穆公」の所を問題にしてみよう。この文をアーサー・ウェイリーは「Who went with Duke Mu to the grave」と訳している。ここには原文のない「to the grave」が加えている。異国の読者にこの詩の大意を伝えるには、一種注釈的な訳で有効かもしれないが、あまり「to the grave」を強調しすぎると、危険性も伴う。原文が分かりやすくなつた分、「the grave」のイメージによつては、二千年も昔の生死觀を、現代的な価値觀に基づく生死觀へと結んでしまうのである。

注の十五に付録してある吉川幸次郎の日本語現代語訳は「穆公さまのお伴をしたのは誰」とあるが、「go to the grave」、これは「従」とか「伴」とかの古代人の美意識とはずいぶん違つていて、現代人にとっていかにも残酷な非人道的な話である。だから作中の主人公にとって恐怖そのもの以外のなにものでもないはずである。従つてウェイリーは主人公のことを、このように書く。

This Yen-hsi was the pick of all our men, But as he drew near  
the tomb-hole, His limbs shook with dread.

原文の「臨其穴、端端其慄」には、とくに「he」という主語によって限定されていない。ここには、主人公の奄息、そして彼と同時に殉葬した百七十七人をも指すことが可能である。訳文には特定の「he」を使い、そして「But」という接続詞によって前のセンテンスー「Now this

## 「谷行」と「黄鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

Yen-hsi was the pick of all our men を受けている。こうすると、このような優れた人、百人の男にも匹敵しようという男は、逆接の「But」によって、それにしてもやはり普通の人間と同じ、「死」というものに直面するとき、恐怖を感じるのだと、決め付けておくのである。

ここにアーサー・ウェイリーの古典詩に現代的な解釈を加える手法が顕著に見える。そもそも洋の東西を問わず、現代人の穆公に殉死することに対する評価は、大体このような人道主義的な傾向を持ってしまいがちなのである。現代中国の『詩經』研究者の一人である袁梅が、このくだりを現代語に次のように訳している。

誰が穆公といっしょに死んだのか  
子車奄息は生き埋めにされ殉死した  
蒼天よ、蒼天！  
なんて素晴らしい人をこんな酷い目に遭わせたのか<sup>\*16</sup>

そして注釈の所で、「人々は三良など百七十七人の無残な死を同情し、支配者の暴挙と残酷な殉死制度を憎しみ、怒りをこめて人間を食うような奴隸制社会を告発する。この詩はその怒りの告発書である」<sup>\*17</sup>と、「黄鳥」の位置付けを「怒りの告発書」に決めた。しかし、これはいかにも今日の価値観をもって、古代の出来事を詮索する色合いが強すぎる。このような解釈とは、まったく違う角度の解釈がある。『史記』「秦本紀」に次のような史実を記録してある。

「秦の穆公が群臣と宴し、酒酣にして言って曰く、生きて此の樂しみを共にする。死して此の哀しみを共にせんかと。是に於て奄息、仲行、鍼虎許諾す。公薨するに及び、皆死に従う。」<sup>\*18</sup>

『詩經』の注釈書として、鄭玄の「箋注」は「三人が自殺して死に従った」のだとしている。中国唐の時代に生きた孔穎達は、『毛詩正義』に「黄鳥」の殉死者は、やはり『史記』にあるように、約束を守り、死に従つ

たものだととの見解を見せてている。このような説によると、三人の死は酒酣の時の約束を実践したもので、自ら死を選んだのである。こうすると、詩全体の傾向としては穆公を非難するのではなく、殉死した人が、当時社会の美德としての忠、義、信を、しっかりと守りきったことに対する礼賛だと理解すべきである。これに従って、人々は詩の主人公の崇高な殉死行為に感心して、このような素晴らしい人間のために「如可贖兮、人百其身」（もし身代わりがきくのなら、われわれは体を百さしだしてもよろしいのに）と詠ったのだと認識する余地がある。

#### (四)

以上アーサー・ウェイリーの両作品の翻訳を考察してきたが、この両作品の翻訳に際して、アーサー・ウェイリーの使った手法は、かれの言葉を借りて言えば、つまり古典の原文を、それを利用しようとする人々の持つ現代的な意義を与えて訳すというものである。アーサー・ウェイリーは、また訳文の風格や趣を、「文学的」なもの、つまり構文の美しさ、訳者の創造性を重視する方向に重きを置いた。

アーサー・ウェイリーの翻訳は、大きな変容を伴わせていることであるが、古典に対する解釈は十人十色でやむを得ないことであろう。外国語に訳される時は勿論のこと、自国の現代語で表現する時にも原典に対する理解の違いによって色とりどりな訳が可能なのである。文学作品に対する理解は時代によって違ってくるものである。遠い昔の古典作品を今日に、或いは文化の違う外国人に理解してもらうために、その古典に対して、ある種の現代的な解釈を施す必要もある。古典作品を外国語に翻訳するときに、この解釈は訳者が意識的に或いは無意識的に行うのか別にして、いずれにせよ、どうしても自ずから訳文に潜り込んで、今日の読者に感動を与えるのである。これは文学の翻訳は一種の再創作であると言われる所以であろう。アーサー・ウェイリー訳「谷行」や「黄鳥」もまさに、この再創作によって、今日に生きる読者に文学的な衝撃を与えるのである。文学作品が異文化に翻訳されるとき、必ずある種の変容が起きるのである。われわれがその変容を指摘することによって、異文

## 「谷行」と「黃鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

化に位置する訳者、或いはその読者層に対する認識も深めて行く事ができるはずである。翻訳文に現れた「変容」を究明する意義の大きな一つは、ここにある。

### 注

- \*1. Arthur Waley (1889年～1966年)、イギリス Tunbridge Wells で生まれる。ケンブリッジ大学でギリシア、ラテンの古典を学んだのち、1913年大英博物館館員になる。東洋には来た事がないが、独学で中国語や日本語を修め、数多くの翻訳や著書を著し、ロンドン大学の東洋学科にもときどき出講する。1948年ロンドン大学東洋アフリカ学院中国詩名譽講師に推される。1959年日本政府より勲三等瑞宝章を贈られる。
- \*2. Arthur Waley: *The Way and its Power: a Study of the Tao Te King and its Place in Chinese Thought.* George Allen and Unwin Ltd, London, 1936. 序文参照
- \*3. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, George Allen and Unwin Ltd, London, 1921.
- \*4. Arthur Waley: *The Book of Songs*, George Allen and Unwin Ltd, London, 1937.
- \*5. 『謡曲大観』第三巻 昭和39年 明治書院 1938頁
- \*6. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, George Allen and Unwin Ltd, London, 1921.p.230
- \*7. 『謡曲大観』第三巻 明治書院 昭和39年 1940頁
- \*8. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, p.231
- \*9. 『謡曲大観』1947頁
- \*10. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, p.235
- \*11. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, p.229
- \*12. Arthur Waley : *The No Plays of Japan*, p.235
- \*13. 『謡曲大観』1949頁
- \*14. 「秦伯任好卒、以子車氏之三子奄息、仲行、鍼虎為殉、皆秦之良也、国人哀之、為之賦黃鳥」 『春秋左氏傳』明治書院 昭和49年 482頁

\*15. 朱熹集注『詩集傳』中華書局香港分局 1961年 77頁

Arthur Waley: The Book of Songs, George Allen and Unwin, 1954.  
p311.

吉川幸次郎訳『詩經國風』下 岩波書店 昭和33年 200頁

交交たる黃鳥は

棘に止まる

誰か穆公に従うや

子車奄息

維れ此の奄息は

百の夫にも特せんに

其の穴に臨みて

端端と其れ慄く

彼の蒼き者は天

我が良き人を殲くす

如し贖う可くんば

人は其の身を百にせん

(ちっちゃなからうぐいすが、なつめの木にとまっている。穆公さまのお伴をしたのは誰。それは子車の家の奄息。この奄息こそは、百人の男にも匹敵しようという男。それが墓穴を前にして、ぶるぶるふるえている。ああ青い色をたたえたみそらよ。わかれのよき人をみなごろしにしたもうのか。もし身代りがきくのなら、われわれ人民は体を百さしだしてもよろしいのに。)

\*16. 袁梅『詩經訳注』齊魯書社 1983年 338頁

誰跟穆公一同死？

子車奄息殉活葬。

蒼天？蒼天！

竟使好人遭大難

\*17. 「人民同情三良等一百七十七個無辜的犧牲者、痛恨反動統治者的暴行和慘絕人寰的殉葬制度、憤怒地控訴那人吃人的奴隸制社會。這首詩、便是滿腔怒火的控訴書。」

「谷行」と「黃鳥」から見るアーサー・ウェイリーの訳文の変容

\*18. 「秦穆公與群臣飲、酒酣、公曰生共此樂、死共此哀。於是奄息、仲行、鍼虎許諾。及公薨、皆從死。」